若者と地域活動

―福井市における大学生のまちづくり活動の事例から―

羽田野　慶子

概　　要

本稿では，地方都市の若者の地域活動について，2011 年に福井県で実施したアンケート調査をもとにその現状を把握したうえで，実際に福井市で地域活動を行っている学生団体の事例を紹介し，若者に対する地域活動への参加機会の提供が若者をどう変化させるかについて検討する．

福井県で地域活動もしくはボランティア活動に参加する若者の割合は３割弱に留まる．しかし，参加しない理由は，活動に関心がないのではなく，参加の仕方がわからないからである．

若者に地域活動参加の機会を提供することがもたらす効果は，もともと地域活動に熱心な「地域活動アクティブ群」,地域活動への意欲を高める「地域活動ウォームアップ群」,地域活動の経験を職業キャリアに活用する「地域活動ポテンシャル群」の三つに類型化することができた．

キーワード
地域活動，若者，希望，まちづくり，キャリア教育

1．地域における「若者」の語られ方　―若者が地域にいない？

少子高齢化が加速度的に進む地方都市において，地域社会の未来の担い手である「若者」は希少な「資源」である．「地域に若者がいない」,「若者が地域活動に参加してくれない」,「若者が地域から出て行ってしまう」―まちづくりや自治会活動など，さまざまな地域活動に携わる人々による「若者の不在」を嘆く声は，おそらくどんな地方都市でも共通に聞かれるものではないだろうか．

福井市では，公民館が地域コミュニティの学習・活動拠点として重要な役割を果たして

おり，地域づくりの担い手を育てる「青年教育」が公民館活動の目的の一つとなっている．しかし，その「青年事業（地域の若者が参加する活動）」のコーディネートに携わる公民館職員からは，「まず，どこに若者がいるのかわからない」という声が多く聞かれる．若者に地域活動に参加してもらい，地域コミュニティの一員として役割を果たしてもらいたいという期待はあるものの，「募集しても集まらない」「（若者自身が）やりたいことを持っていない」「（若者の活動へのかかわり方が）お客様感覚で無責任に見える」ことが多々あるのだという[1)]．

このように，地域コミュニティにおいて「若者」（あるいは「青年」）とは，どこか扱いづらい，とらえどころのない存在のように思われていることが多い．若者が地域活動に積極的でないことを問題視する見方は，「最近の若者は真面目に働かない」「すぐ仕事をやめてしまう」「就職する意欲がない」というような，労働をめぐる「若者」の語られ方と同型である．

地域活動に参加しない若者に対する不満の声は，若者への期待の大きさの裏返しである．少子高齢化が進む地域において，若者は人口の上でも，また，地域社会のさまざまな意思決定の場にまだ十分参入できていないという意味でも，明らかなマイノリティである．若者が地域活動に参加しないことで，地域活動の担い手が中高年以上の年齢層に偏っているという現状は，見方を変えれば地域活動の場が中高年以上の層に占有されている状況であり，若者が地域活動に参入しづらい，いわば地域活動から「排除」された状況にあるとも捉えられよう．

労働という観点からは，雇用環境の悪化とセーフティネットの未整備により，労働の場から「排除」され「無縁化」する若者を，コミュニティに「包摂」する支援システムの構築が必要とされている（宮本 2012）．また，現代の若者たちが労働によっては満たされない「希望」を抱えたまま，「出口」を求めてさまよう「希望難民」化しているという見方もある（古市 2010）．

本稿では，地方都市の若者の地域活動について，2011 年に福井県で実施した『福井の希望と社会生活調査』をもとにその現状を把握したうえで，実際に福井市で地域活動を行っている学生団体の事例を紹介し，若者に対する地域活動への参加機会の提供が若者をどう変化させるかについて検討する．労働とは異なる「地域活動」という切り口から，現代の若者の社会参画のあり方を展望する試みでもある．

1）公民館職員を対象とする福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」受講者へのヒアリングより（2011 年 5 月～ 2012 年 3 月）．

2. 若者の「希望」と地域活動　―2011 年福井県調査より

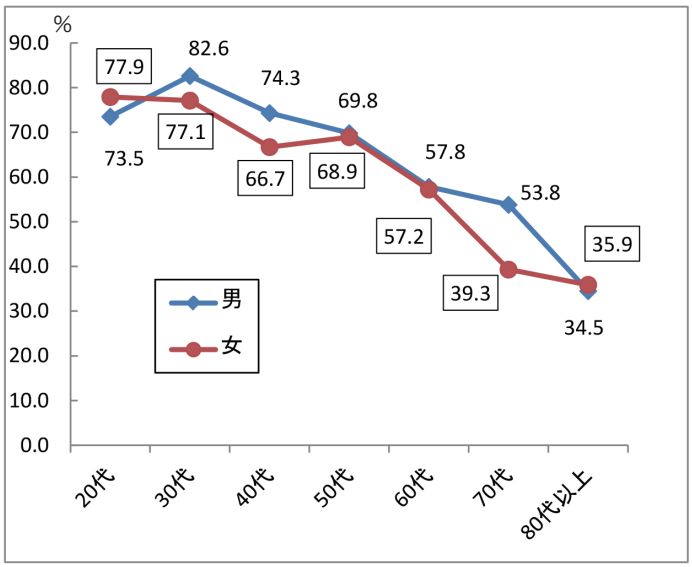
1. 福井の若者の「希望」

本節では，2011 年に実施した『福井の希望と社会生活調査』のデータをもとに，福井の若者の「希望」のありようと地域活動の状況について検討する．なお，以下の分析では 20 歳代を「若者」として捉えることとする．

(1)「希望」を持つ人の割合

福井の人々が「希望」(将来実現してほしいこと，実現させたいこと) を持っている割合は，20 歳～ 59 歳の年齢層で 71.8％であり，これは全国調査の 70.0％よりやや高いが，ほぼ同じ水準である（玄田 2013：49）．年代別に「希望」の有無を見ると，概して若い年代ほど「希望」を持っている割合が高く，30 代では男性で 82.6％，女性で 77.1％と約 8 割を占めるが，年齢が上がるに連れて「希望」を持つ人は少なくなり，80 代以上では男女とも 3 割台にとどまる．男女別に見ると，全体としては男性 67.3％，女性 61.7％と男性の方が「希望」を持っている割合が高い傾向にあるが，20 代と 80 代のみ男女差が逆転しており，とくに 20 代では，男性 73.5％に対して女性 77.9％と，女性の方が「希望」を持っている割合が高くなっている．

図 1　「希望」がある人の割合（年代別，男女別）



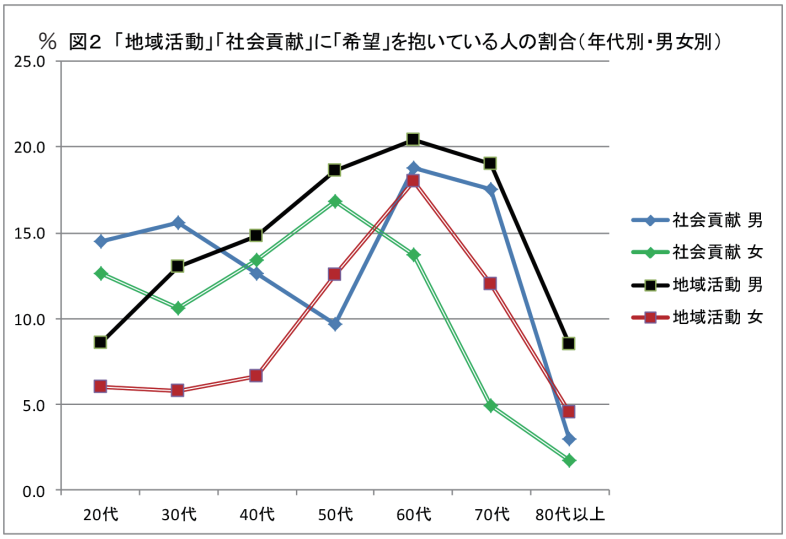
(2)「希望」の中身

福井の人々の抱いている「希望」は何に関係するものなのか，年代別・男女別に見ると，男性の場合, 20 代から 40 代までは「仕事」が最も多く, 50 代で「家族」, 60 代以降は「健康」が最も多くなる．女性は，20 代では「仕事」が最も多いが，30 代から 50 代では「家族」がそれに代わり，60 代以降は男性と同様「健康」が最も多くなる（表 1）.

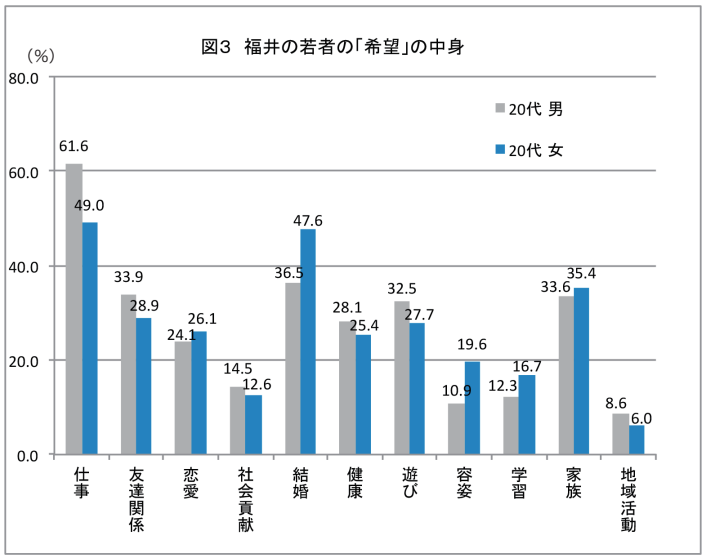
「地域活動」を「希望」の中身として挙げる割合は全体に低く，とくに若い年代・女性で低い傾向にある．男性では 20 代の 8.6%から次第に上昇し，50 代から 70 代にかけては約 2 割が「地域活動」を「希望」として挙げているが，女性は 20 代から 40 代まで 5 ～ 7%程度で推移し，50 代から 70 代では 12%～ 18%に上昇するが，いずれの年代でも男性より低い水準となっている．また,「社会貢献」を「希望」の中身として挙げる割合は,「地域活動」に比べると若い年代でやや高い傾向にあり，40 代と 50 代では女性の方が高いが，それ以外の年代では女性より男性の方が「社会貢献」を「希望」として挙げる割合が高い（図 2）.

表 1　「希望」の中身（複数回答）(%)

年代	20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上	
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
仕事	61.6	49.0	58.4	45.2	49.5	35.1	38.8	27.7	22.6	14.5	15.3	6.4	12.3	3.1
友達関係	33.9	28.9	17.4	14.9	10.5	13.1	7.1	10.9	8.4	13.4	11.5	10.4	4.9	10.7
恋愛	24.1	26.1	13.2	6.7	3.7	3.2	0.9	0.2	1.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0
社会貢献	14.5	12.6	15.6	10.6	12.6	13.4	9.7	16.8	18.8	13.7	17.5	4.9	3.0	1.7
結婚	36.5	47.6	21.5	15.6	6.4	2.6	2.4	2.9	0.3	2.5	1.3	1.5	0.6	1.1
健康	28.1	25.4	32.9	31.4	32.8	36.9	37.0	38.5	36.0	38.2	39.0	28.7	35.4	23.0
遊び	32.5	27.7	29.7	16.7	25.2	16.7	17.5	15.2	10.6	11.6	8.2	3.4	3.1	1.7
容姿	10.9	19.6	8.5	14.9	1.2	7.6	0.4	2.5	0.7	1.6	0.6	0.8	0.0	0.8
学習	12.3	16.7	13.2	13.9	9.7	13.3	7.8	11.4	6.4	7.5	7.1	3.2	3.7	0.0
家族	33.6	35.4	45.9	51.1	44.5	51.8	41.0	42.6	32.4	30.0	26.0	16.8	23.9	9.0
地域活動	8.6	6.0	13.0	5.8	14.8	6.6	18.6	12.5	20.4	18.0	19.0	12.0	8.5	4.5



さらに，20 代男女の「希望」の中身については，男性は「仕事」が約 6 割と圧倒的に多く，次いで「結婚」「友達関係」「家族」「遊び」がそれぞれ 3 割強となっている．女性は「仕事」と「結婚」がそれぞれ 5 割弱と拮抗しており，次いで「家族」が約 35％を占める．「地域活動」を挙げる割合は男女とも最も低く 1 割を切っており，男女とも年代別で最も低い割合となっている．一方「社会貢献」については．男性 14.5％，女性 12.6％と他の年代に比べてそれほど低くない割合となっている（図 3）．「地域活動」「社会貢献」のいずれかに関する「希望」があると答えた割合は，20 代男性で 18.6％，20 代女性で 14.3％となる．



(3)「希望」の実現可能性

「希望」の実現可能性をどう捉えているかについて，年代別に見ると，男女とも若い年齢層ほど実現への見通しがポジティブな傾向がみられる．多くの年代で男女差は見られないが，20 代では女性の方が「希望」の実現可能性をポジティブに答える割合が高く，70 代では男性の方が高い．

表2 「希望」は実現できそうか（年代別、男女別）（%）

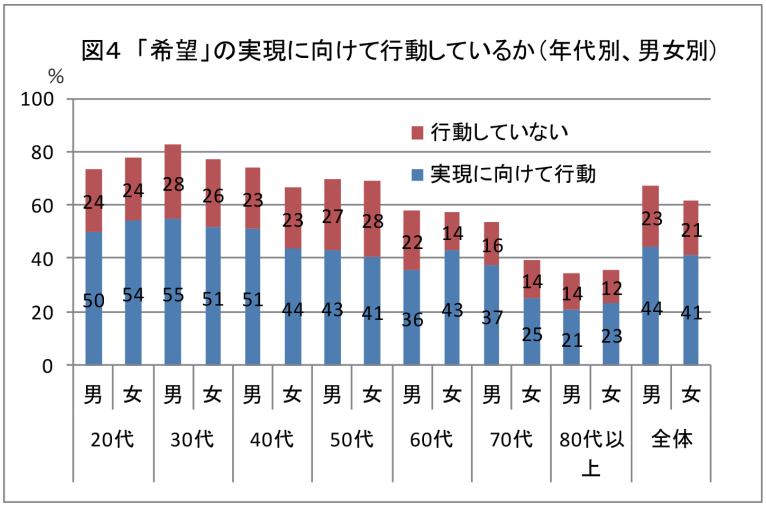
	男性		女性	
20代	82.1	<	87.4	*
30代	76.4		80.7	
40代	71.7		75.6	
50代	74.8		71.5	
60代	67.1		68.7	
70代	70.5	>	59.6	**
80代以上	62.9		60.8	
全体	73.6		74.4	

*…p<0.05, **…p<0.01

注）「実現できる」「たぶん実現できる」を足した割合を示す。

(4)「希望」の実現に向けての行動

先に確認したように，若い世代ほど何らかの「希望」を持っている者の割合が多い．「希望」を持ち，さらにその実現に向けて具体的な行動をしている者は，20 代～ 30 代では男女とも 5 割を超えており，20 代に限ってみると男性 50％に対し女性 54％と，女性の方が「希望」の実現に向けて行動している [2)]．



(5) 福井の若者の「希望」

ここまでの分析から，福井における 20 代の若者の「希望」のありようについて，以下の四点にまとめることができる．

①7 割～ 8 割の若者が「希望」を持っている（全国調査と同水準）．

②「希望」の中身として最も多いのは男女とも仕事であり，女性はそれに並び結婚に関する「希望」も多い．

③地域活動や社会貢献に関する「希望」を持つ者は 1 割～ 2 割であり，男性の方がやや多い．

④「希望」を持っている割合，実現可能性をポジティブに捉える割合，その実現に向けて行動している割合は，いずれも女性の方が高い．

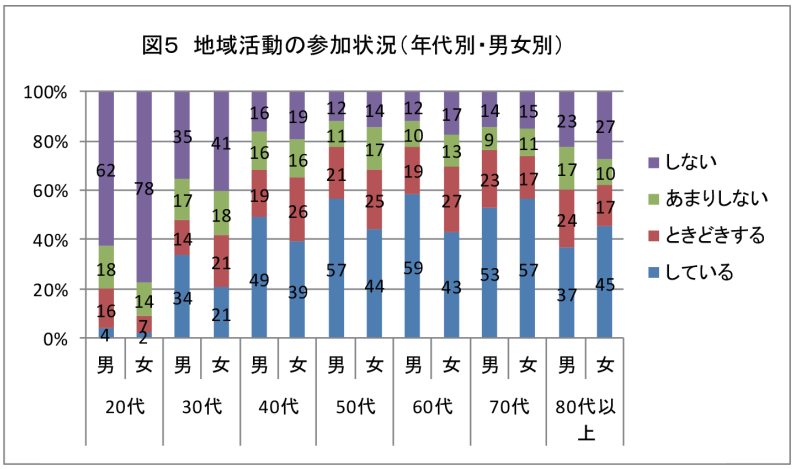
2. 若者の地域活動への参加とその理由

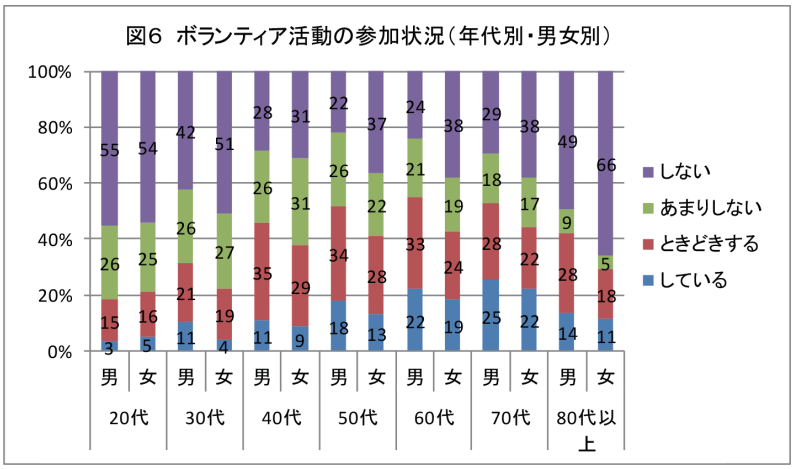
(1) 地域活動，ボランティア活動の参加状況

若者の地域活動，およびボランティア活動の参加状況は，図 5，6 の通りである．20 代

2) ただし全国調査（2011 年実施のインターネット調査，20 代～ 60 代対象，回答者数 11,556 名）と比較すると，いずれの年代でも「希望」の実現のために具体的な行動をしている者の割合は低い（玄田 2011）．

の参加状況を見ると，地域活動への参加は「参加している」「ときどきしている」を足しても男性 20%，女性 9%と，他の年代に比べて極端に参加が少ない．ボランティア活動についても同様に，男性 18%，女性 21%と，年代別に見て最も参加が少なくなっている．地域活動かボランティア活動のいずれかに参加している割合は男性 29.4%，女性 25.9%であり，福井県の 20 代男女の 3 割弱がなんらかの社会活動に参加している．しかし言い換えれば，地域活動，ボランティア活動のいずれにも参加していない若者は 7 割強にのぼることになる．





(2) 参加しない理由

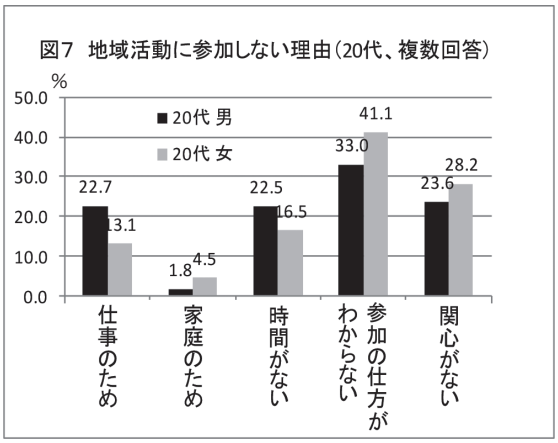
20 代の若者が地域活動に参加しない理由は何か．最も多い理由は「参加の仕方がわからない」というもので，男性 33%，女性 41%にのぼる．これは活動に「関心がない」や「時間がない」とする割合をそれぞれ上回っている（図 7）．ボランティア活動に参加しな

い理由についても同様の結果であった．地域活動への「参加の仕方がわからない」と答えた者の割合は，若い年代ほど多い．ボランティア活動についても同様で，概ね若い年代ほど「参加の仕方がわからない」と答えている（表3）．

つまり，地域活動やボランティア活動に参加している若者は他の年代と比較して非常に少ないが，それは参加の仕方がわからないからであって，彼ら／彼女らを参加に結び付けるような何らかの働きかけがあれば，若者の地域活動等への参加は増える余地があると考えられる．

表3　参加しない理由として「参加の仕方がわからない」と答えた者の割合(%)

		20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
地域活動	男性	**33.0**	17.0	6.4	3.6	3.9	4.3	3.7
	女性	**41.1**	25.6	7.8	5.4	5.2	4.2	2.5
ボランティア活動	男性	**33.0**	30.6	19.2	15.7	14.7	14.9	16.0
	女性	**42.8**	32.0	21.1	17.4	20.0	13.6	5.3



3．地域活動に参加する若者たち　―福井大学EMP実行委員会の事例

1．学生によるまちづくり活動の展開

(1) 女子学生の発案で始まった活動

学生によるまちづくり活動の事例として，ここでは2010年度に発足し，筆者が活動を支援してきた学生によるまちづくり団体「福井大学EMP実行委員会」(以下, EMPと略記)を取り上げる．「EMP」とは，「駅前プロデュース」と「Enjoy My town Project」の二つの言葉の頭文字で，学生たちの発案による名称である．福井駅前の中心市街地をフィールドとし，身近なまちを楽しみながら新しい提案をしたいという意味が込められている．

EMP の参加学生が在籍する福井大学教育地域科学部地域科学課程は，教員免許を取得する学校教育課程とは異なり，福井県内で企業への就職や公務員を目指す文系学生の進学先となっている．教育地域科学部の入学者に占める福井県内出身者の割合は 84.7%（2013 年度入学生）であり，大多数が地元出身かつ地元への就職を希望する学生である．また，大学が位置する福井市は，モータライゼーションとともに郊外化が進展し，福井駅周辺の中心市街地の空洞化が深刻化しているものの，車で移動することが可能になる大学生以上の世代にとっては，郊外の大型ショッピングセンターに行けば大抵のものは事足りるため，危機感を持って受け止められてはいない現状がある．地方都市で親元を離れずにそこそこ満足のいく生活が保障される，「ほどほどパラダイス」（阿部 2013）を謳歌する学生が多いと言える．

EMP が発足したきっかけは，2009 年 12 月に奈良県の学生団体が主催して行われた地域活性化イベントに福井大学の女子学生数名が参加し，自分たちの地元でも地域に貢献する活動をしてみたいと筆者に相談を持ちかけたことであった．当時は，福井駅西口再開発をめぐって市の計画が定まらず，住民の求めるまちづくりのあり方と行政が示す再開発計画とのギャップが問題として指摘されていた時期であった．そのため，学生たちは自分たちの取り組むテーマとして福井駅前の活性化に焦点を絞って活動することとなった．

学生たちの活動を支援するにあたっては，EMP による活動を筆者の担当授業である生涯学習系専門科目「社会教育計画」（3 年生対象）と連動させることによって，①中心市街地活性化基本計画をはじめとする福井駅前周辺のまちづくりに関連する基本情報の学習，②企画会議への助言，③行政，市民団体等まちづくり関係者との連携支援，等を行った．活動を授業の一部として位置付けたことによる利点は，以下の２点があげられる．まず，大学内での活動場所と若干の活動経費を確保することが可能となったこと，また，まちづくり活動そのものにはとりたてて関心がないものの，単位修得のために授業を履修する学生が活動へ参加するきっかけとなったこと，である．一方，授業を履修できるのが３年生に限定されるため，前後の学年を含めたメンバー構成が困難であり，複数年度にわたる活動が制約されるという難点もあった．

これまで EMP のメンバーとして活動に参加した学生は，2010 ～ 2013 年度の 4 期で合計　48 名であり，そのうち女子学生が 43 名と全体の 9 割を占める（表 4）．歴代の代表も女子学生が務めており，女子学生主体の活動団体といえる．

表4　EMP参加学生数（2010～13年度）注1)

	女子	男子	計
1期（2010）	15	0	15
2期（2011）	8	0	8
3期（2012）注2)	11(1)	4	15(1)
4期（2013）	10	1	11
合計	43	5	48

注1）参加学生は各年度の3年生。
注2）2012年度のみ2年生女子1名を含むが（カッコ内）、合計数には含まない。

(2) まちづくりワークショップの開催と提言書の刊行　―2010 年度の活動

初年度にあたる 2010 年度に行った主な活動

は，①福井県内外の学生が駅前活性化プランを練るワークショップ「駅前プロデュース in FUKUI」の開催と，②それに基づくまちづくり提言書の刊行である．

4 月に実行委員会が発足し，概ね週 1 回の会議を重ねながら，10 月開催のワークショップに向けて準備を行った．会議では実行委員会メンバーの役割分担，年間スケジュールの決定から始まり，駅前の現状を知るための文献調査や，福井市都市戦略部中心市街地振興課，まちづくり福井（株），福井まちなか NPO など行政や市民団体を招いた学習会を重ねた．これらと並行して駅前のまちあるき（フィールドワーク）を行いまちの現状を学びながら，企画書作成，チラシ作成と参加者募集の呼びかけ（広報活動）等を進め，ワークショップの内容を練り上げていった．会議は，メンバー全員で集まって行ったものだけでも，ワークショップ当日までの 4 月～ 10 月に 30 回，終了後ワークショップの成果に基づく報告会や提言書の作成のために 10 回以上開催している．

実行委員会が福井駅前活性化のコンセプトとしたのは「歩きたくなる駅前」である．「ふらりと歩けば自然も歴史も人情も感じられる　温かな気持ちになれる　そこには“福”が溢れている」．これは学生たちが会議で意見を出し合った結果たどりついたものだが，「福井市中心市街地活性化基本計画」（平成 19 年 11 月）における活性化目標「1　訪れやすい環境を作る（出会う），2　居住する人を増やす（暮らす），3　歩いてみたくなる魅力を高める（遊ぶ）」のうち，3 つめの目標にあてはまるものである．この「歩きたくなる駅前」というコンセプトのもと，以下の三つの課題を達成することを 10 月開催のワークショップの目的とした．

①実際にまち歩きをして福井駅前の現状を知る．

②どうすれば「歩きたくなる駅前」にできるか，駅前プロデュースのプランを練る．

③自分たちが考えたプランを発表する．

ワークショップ当日は一般参加者として県内の大学・高専の学生 22 名，県外の大学・大学院生 21 名，これに実行委員 15 名，当日スタッフ 15 名を加え，合計 73 名の学生が参加し，5 ～ 7 名から成る 10 のチームに分かれて 1）福井駅前のまち歩き，2）駅前活性化のプラン作成，3）プレゼンテーションを行った．学生が提案した活性化プランの内容は，「商店街」「駅前ツアー」「MAP」「空間づくり」の 4 つが主な構成要素となっており，新たな大型施設をつくるというようなハード整備型の提案よりも，既にある建物や商店街，街並みや自然を生かし市民の出会いを生むようなソフト事業型の提案が多く出されたのが特徴であった．

以上，初年度の活動は，福井駅前という地域のまちづくりに関心を抱いた学生による地域活動のいわば「はじめの一歩」であり，次年度以降に引き継がれる活動の道筋を示した点で評価できる．しかし，それはなお活性化プランの「提案」にとどまるものであり，具

体的かつ継続的な地域活動の実践にまでは至らなかった[3)].

(3)「提案」から「実践」へ　―2011 年度の活動

実行委員会の２年目は，それまで活動してきた４年生に代わり，新たに３年生のメンバー８名で活動を引き継いだ．前年度のワークショップで出された駅前活性化プランのうち，①女性や若者をターゲットとする「まちあるきツアー」の実施と，②駅前の店舗や立ち寄りスポットなどを取材して伝える「情報発信」の二つを活動の柱とした．前年度のように大きなイベントを実施をするのではなく，日常的にできる小さな活動をコツコツと継続することを目標としたのが特徴であった．

まちあるきツアーは，学生を対象に参加者を募り，委員会メンバーがガイドとなって５～６人程度の少人数で駅前を歩き，楽しみ方を伝えることによって，参加者自身がリピーターとして駅前ユーザーになってもらうことを目的とし，７月と 11 月の２回実施した．女性が好みそうな雑貨店やカフェをめぐる「乙女ツアー」，ギャラリーなどのアートスポットをめぐる「芸術ツアー」など，テーマを決めてコースを組み，まちあるきの後にはツアー中に撮った写真を使ったコラージュのワークショップなど，参加者同士が交流できる企画を組み込んだ．

情報発信では，①ブログによる駅前情報発信，②フリーペーパーの発行の二つを行った．EMP のブログ「Enjoy My town Project in FUKUI」(http://ameblo.jp/fukudai-emp/) では，実行委員会の活動報告やメンバーによる個人的なまちあるきレポート，駅前イベント情報の発信などを行った．フリーペーパー「Enjoy My town Paper」は B5 判で６～８ペー

3）ワークショップ開催後，学生が提案した駅前活性化プラン，および行政や商店街，市民に向けた駅前のまちづくりのための提言をまとめ，『学生発信！駅前プロデュース in FUKUI　提言書』(2011 年）を刊行した．以下は提言内容の抜粋である．

(1) 行政に対して；
- 街の意見・現場の意見を積極的に汲み取ってほしい
- 行政と市民の考えのギャップを埋めるため，
  ①市民への明確な情報提示，②プランの実現に向けたサポートをしてほしい

(2) 商店街に対して；
- 誰でも気軽に立ち寄れる店づくりをしてほしい

(3) 市民に対して；
- 福井駅前は歩いたら楽しめるので，もっと足を運んでほしい
- 行政のまちづくり施策を知り，意見を伝えよう

(4) まちづくり活動団体に対して；
- 市民・商店街・行政のパイプ役になろう
- 活動を継続するため，新しい人材・後継者を育成する意識を持とう

(5) 全ての人に対して；
- 考えているだけ，要望を言うだけではなく，自ら行動を起こそう

ジ，カラー印刷の小冊子で，まちあるきツアーなどEMPとしての活動紹介のほか，駅前の店や立ち寄りスポットの取材，駅前利用の実態調査などを手作りのコラージュ風にまとめたもので，年3回発行し，駅周辺の公共施設や飲食店に無料で配布した．

以上のようなEMP2年目の活動では，まちあるきツアーの企画・実施，及びブログやフリーペーパー作成などの情報発信活動を通じて，若者に駅前の魅力を伝えるという活動本来の目的のみならず，メンバー自身がまちあるきを重ね，駅前の店等に取材のため足を運ぶことによってまちに親しみ，駅前のさまざまな人々と交流したことによって，駅前のまちづくりを志す人，団体，店舗等とのゆるやかなネットワークを作ることができたことが最も大きな成果といえる．自分たちが主催者となって企画する活動だけでなく，他団体の開催する駅前のまちづくりに関するイベント，ワークショップ等に積極的に参加したことも，他団体との繋がりを構築する上で効果的であった．

(4)「まちづくり」から「ひとづくり」へ　―2012年度以降の活動

3年目となる2012年度は，「福井の未来を担う子どもの育成プロジェクト」をテーマに掲げて活動した．これまで活動の対象としてきた学生と同世代の若者層だけではなく，次世代の地域を担う年齢層の子どもたちを対象にしたという点で，大きな転換を遂げた年である．このような転換を促したきっかけの一つとして，福井県の助成金への応募が挙げられる．

2011年12月，福井県は男女参画・県民活動課に若者チャレンジ支援室を設置し，福井県の若者の地域貢献・社会貢献活動を支援する取り組み「若者チャレンジ応援プロジェクト」をスタートさせた．プロジェクトの柱は，地域活動等に意欲のある若者たちの仲間づくりや情報交換を促進するための「ふくい若者チャレンジクラブ」の活動と，さまざまな地域で新しい活動に挑戦しようとする若者や若者団体に助成金を出す「ふくい夢チャレンジプラン支援事業」の二つである．「ふくい夢チャレンジプラン支援事業」には，県外・海外での専門技能・知識習得を支援する「武者修行型」と，福井の地域活性化を図る若者グループの活動を支援する「地域活性化型」があり，EMPは地域活性化型の夢チャレンジプランに「福井の未来を担う子どもの育成プロジェクト」を応募し，採択された．

「福井の未来を担う子どもの育成プロジェクト」では，福井の子どもたちを自ら地域の魅力を言葉にして発信できる人材として育てることを目的に，福井駅周辺の中心市街地に位置する順化地区の公民館と連携し，放課後に公民館を利用する小学生を対象に，まちあるきを通じて福井駅周辺の見どころを紹介するまちあるきガイドを育成する連続ワークショップ「飛び出せ！駅前探検隊」を実施した．これは，初めに駅周辺の歴史や見どころに詳しい大人がガイド役として子どもたちを案内するまちあるきを行い，子どもたちがま

ちについて学んだ後，今度は子どもたち自身がガイド役となって，福井市内の駅周辺以外の地区に住む子どもたちを案内するまちあるきを行う，というもので，約3か月に渡る4回の連続ワークショップである．最終回では，順化地区の小学生10名，駅周辺以外の地区の小学生6名が参加し，3つのコースに分かれてまちあるきを行い，順化地区の子どもたちがクイズ形式で駅周辺の見どころを解説した．

さらに2013年度は，公民館と連携して小学生とともに活動するという前年度の方針を引き継ぎ，まちあるきをした後に子どもたちにとって「理想の駅前」の模型を制作する連続ワークショップ「子どもと学生が考える福井駅前未来創造プロジェクト」を実施し，2013年7月に福井駅前に開設された福井市まちづくりセンター「ふく＋」（フクタス）を会場に，子どもたちが学生と制作した模型の発表・展示を行った．

2012年度以降の活動は，若者である学生たち自身がまちに足を運び，まちの魅力を知り，同世代の若者に向けて発信するというそれまでの活動から，さらに若い世代である子どもたちを未来のまちづくりの主体として育て，学生たちも共に育つことを企図した活動に発展した．いわば「まちづくり」から「ひとづくり」への転換を遂げたと言える．

2.「きっかけ」を与えられた若者はどう変化したか
—EMP参加学生へのアンケートより

(1) EMP参加学生アンケートの実施

大学の授業をきっかけとして，福井駅周辺のまちづくりという地域活動に参加した学生たちは，地域活動への参加によってどのように変化しただろうか．筆者は2013年8月～9月に歴代EMP参加学生全員を対象とする記名式アンケートを実施した．メールでアンケートを送付し，記入して返信してもらう方法を採った．回収数は，1期生6名，2期生5名，3期生14名，4期生10名の合計35名，回収率は72.9％である．1期生，2期生は既に卒業していることが影響し23名中11名と回収率が5割を切ったが，3・4期生は25名中24名の回答を得た．質問項目は，EMP参加以前の地域活動経験および地域活動への関心，活動を通して身についた力，活動後自分自身が変化したこと，現在（活動後）の地域活動状況および地域活動への関心，自由記述等である．

(2) 地域活動への参加状況および関心

EMP参加前に何らかの地域活動に参加していた学生は，35人中19名である（表5）．小学生から高校生までに参加した地域活動としては，「地区のまつり」「子ども会活動」「ジュニアリーダー」など，自治会や公民館での地域活動が主である．大学入学後の地域活動は，

「地区の青年団活動の手伝い」のように居住する地域に密着した活動のほか，「イベントサークルで企画した福井駅前合同学園祭」「ふくい若者チャレンジクラブの活動」など居住地域・出身地域を超えた活動が挙げられた．2 期生以降の学生には，先輩が企画した EMP のワークショップやまちあるきツアーへの参加を挙げる者もいた．

表5　EMP参加前の地域活動への参加状況

	人	%
小中高から大学入学後まで何らかの活動に参加	4	11.4
大学入学後に活動経験あり	9	25.7
小中高のとき活動経験あり	6	17.1
活動経験なし	16	45.7
計	35	100.0

このように約半数の学生が地域活動への参加経験があった一方で，残りの半数の学生はそれまで地域活動の経験が全くなかった．

地域活動への関心についても，EMP 参加前には関心がなかった（「あまりなし」「まったくなし」の合計）者が過半数を占める．ただ，EMP の活動に参加した後は全ての学生が地域活動への関心を持つようになっており，地域活動への参加そのものが地域活動への関心を高めることに強い効果を持つことがわかる（図 8）．

地域活動の参加経験と地域活動への関心の有無をもとに A ～ D の四つに分類すると，全体の 4 割が地域活動の経験も関心も持っていなかった一方（D），2 割はもともと地域活動の経験も関心も高い者たち（A）であった（図 9）

（3）学生時代の地域活動がその後の地域活動にもたらす効果

EMP の活動は 3 年次をもって一旦終了し，4 年次を迎える学生たちは就職活動と卒論研究に移っていく．EMP の活動終了後，学生たちは別の地域活動を行っているだろうか．現在 EMP として地域活動を行っている現役 EMP メンバーの 4 期生を除く 1 ～ 3 期生 25 人

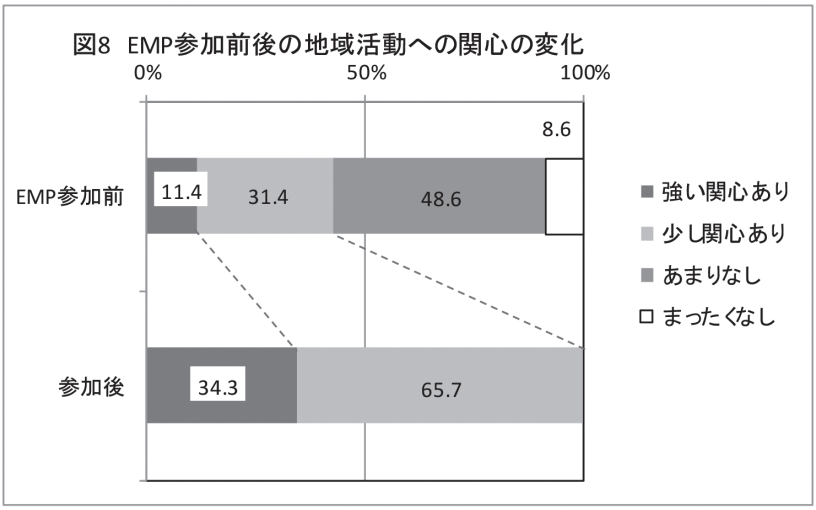
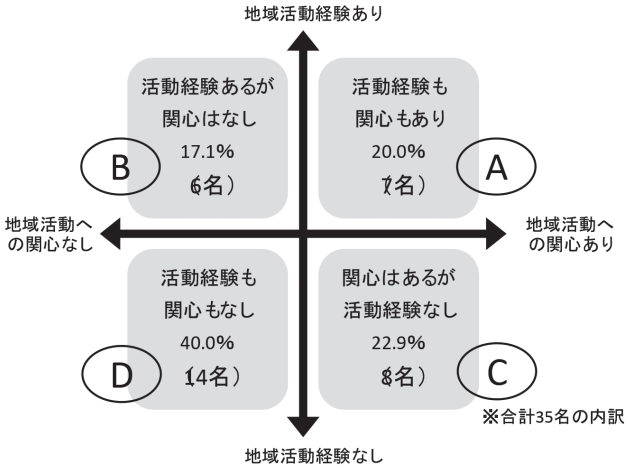


図9　EMP参加前の地域活動参加と関心による分類



について，現在の地域活動への参加状況を確認したところ，EMP 活動後に別の地域活動を行っていたのは 7 名であった（表 6）．そのうち 3 名はもともと地域活動経験があり，関心も高かった者（A）だが，活動経験はあったが関心がなかった者（B），関心はあったが活動経験はなかった者（C），活動経験も関心もなかった者（D）も含まれている．また，現在は地域活動に参加していないものの，今後参加したいと考えている者は 12 名おり，具体的な活動内容を挙げる者もいた．

ここで，EMP 参加前の地域活動参加および関心の有無による分類（図 9 の A ～ D）と，EMP 活動終了後の地域活動参加状況をもとに，学生時代の地域活動（ここでは EMP の活動）がその後の地域活動参加にどのような効果をもたらすかについて類型化を行い，これらの類型にもとづき，それぞれ事例を紹介する．

表6　EMP活動終了後の地域活動参加状況と地域活動効果の類型化

EMP参加前の地域活動参加と関心	活動終了後の地域活動参加：参加した（している）	今後参加したい	特に予定はない	計
A:活動あり＋関心あり	3	3	1	7
B:活動のみ	1	2	2	5
C:関心のみ	2	3	0	5
D:活動なし＋関心なし	1	4	3	8
合計	7	12	6	25

地域活動アクティブ群（9名）
地域活動ウォームアップ群（10名）
地域活動ポテンシャル群（6名）

ｉ）地域活動アクティブ群（9 名）

第一の類型は，もともと地域活動の経験があり，現在既に別の地域活動に参加しているかまたは今後参加しようという具体的な計画を持つ者で，「地域活動アクティブ群」と

名付ける．この類型の学生は，EMP という地域活動参加のきっかけがなかったとしても，自主的に何らかの地域活動を行っていたと考えられる．EMP の活動終了後は，以前から参加していた地域活動を続けたり，自分の地元や勤務地のまちづくりに関わろうという強い意志を持っている．

事例①　（3 期生，福井市出身，県内金融機関に内定）

「まちづくり」や「地域活性化」にもともと関心があり，大学入学後，イベント企画サークルに所属し，自主企画の運営や福井駅前のアート事業に参加するなど，積極的に活動してきた．その際，地域の人に「何をしたいのか，何を目指しているのか」と問いかけられ，学生が地域活動にどう取り組むべきかを考えるようになった．地域活動初心者の学生が多い EMP に対して初めはもどかしさを感じていたが，会議を重ね協力して企画を実践する中で，本音を言い合える仲間になれてよかったと感じている．現在，ふくい若者チャレンジクラブの役員を務めるなど，引き続きさまざまな地域活動を行っている．

事例②　（2 期生，県外出身，出身地の小売業に就職）

大学 1 年の時から学内外のイベントサークルで地域活性化に関わる活動をしてきた．単純に自分の暮らすまちが住みやすく便利になってほしいとの思いから，そのために何がなされるべきかということを考えてきた．EMP の活動で様々な人と出会ったことで，自分の意見を持ち，発言できるようになった．卒業研究で出身地である小松市のまちづくりについて調査し，地元で熱心に活動する人たちと繋がりを作ることができたので，今後は地元の地域活動に参加したいと思っている．

事例③　（3 期生，福井市出身，県内出版業に内定）

もともと地区の公民館で青年団活動や子ども会活動の手伝いをするなどの地域活動をしていた．再開発をしても活性化につながっていない福井駅前に課題を感じていたところ，先輩が作った EMP のフリーペーパーを見て関心を持った．自信がなくネガティブな自分を変えたいという思いから代表に立候補した．代表という人をまとめる立場に立ってみて，何事にも挑戦することの大切さを実感し，前向きな考え方ができるようになったことが自分にとって大きな変化である．就職先の企業がある小浜市は，福井市以上ににぎわいに課題を感じている地域なので，EMP の経験を活かし，会社を通じてさまざまな企画を行い，まちを盛り上げたいと考えている．

ⅱ）地域活動ウォームアップ群（10 名）

第二の類型は，地域活動の経験はなかったが，EMP に参加したことをきっかけに新たな地域活動に参加したり，今後参加の意欲を持つようになった者で，「地域活動ウォームアップ群」と名付ける．この類型の学生は，地域活動への関心はあまりなかったか，あるいは関心があっても行動には移せていなかった者たちである．大学の授業を通じて初めて地域活動を行い，そのことをきっかけに地域への関心を高め，意欲的に地域活動へ参加し始めている．いわば大学における地域活動の機会提供による効果がもっとも大きく出た事例といえる．

事例④　（1 期生，福井市出身，県内金融機関に就職）

EMP に入るまで地域活動の経験はとくになく，福井にもっと楽しいスポットがあればいいのにと漠然と思う程度であった．しかし EMP の活動を通じて，何もないと思っていたのは自分が知ろうとしなかっただけで，実は素敵なスポットがたくさんあることに気づき，福井に対するイメージが変わった．卒業後の地域活動としては，三国海岸のゴミ拾い活動や，バーベキューやゲームをして地域活性化を図る若者対象のイベント（大野市）に参加したりしている．

事例⑤　（3 期生，福井市出身，県内コンサルティング業に内定）

地域活動の経験はなかったが，自分の住むまちについてもっとよく知り，外部（他者）に発信できるようになりたいと思っていた．EMP の活動をして福井のことが以前よりもよくわかり，人に説明できるようになったと思う．活動終了後，まちづくりにもっと携わりたいと思うようになり，大学 4 年になって山崎亮氏が主催する studio-L の事務所を訪ね, 約 1 か月インターンシップに参加した．現在, 角間郷まち育てプロジェクト（池田町），ベンチを活用したまちづくりを行う団体「ベンチプロジェクト」（福井市）など，さまざまな地域活動に参加している．今後もずっとまちづくりに関わっていきたいと思っている．

事例⑥　（3 期生，福井市出身，県内地方公務員に内定）

地域活動の経験はなかったが，福井の中心市街地が今後どうなっていくかには関心があり，自分で何かイベントをやってみたいと考えて EMP に参加した．EMP の活動は学生時代で一番充実していた．もしやっていなかったらなんとなく毎日を過ごし，何も成長できていなかったと思う．公民館の方やワークショップに参加してくれた子どもたちの保護者の方など，学生以外の方たちとの交流で関心を広げることができたし，自分に自信がついた．自治体職員をめざしたのもまちづくりへの関心からである．今後は公務員の仕事の傍

らどこかの団体に入り，駅前の活性化に携わりたいと考えている．

事例⑦　（3 期生，福井市出身，北陸地方国家公務員に内定）

地域活動の経験はなく，地域活性化やまちづくりへの関心もとくにはなかった．EMP の活動では，ワークショップの企画を実行するまでスケジュールを立てたことなどの経験から，先のことを見通して準備することができるようになったと思う．また，自分の長所を仲間から見つけてもらい，自己を捉え直すきっかけにもなった．EMP の活動を通じて新栄商店街（福井駅前のアーケード街の一つ）に友人ができ，その人がイベントを企画しているので，今後機会があれば手伝いたいと思っている．

ⅲ）地域活動ポテンシャル群（6 名）

第三の類型は，以前の地域活動経験に関わらず，当面のところ地域活動の予定はないとする者で，「地域活動ポテンシャル群」とする．EMP の活動そのものには積極的に取り組んでおり，それぞれ自分なりに成長したという実感を得ている．得られた自信や経験を地域活動ではなく職業キャリアに転化しているのが特徴で，目下のところ地域活動は行っていないが，むしろ仕事を通じて地域との関わりを広げており，将来的には何らかの地域活動に繋がる可能性を持っている．

事例⑧　（2 期生，県内嶺北出身，県内製造業営業職に就職）

地域活動への関心は全くなかった．大学 2 年のとき，EMP1 期生の先輩が企画したワークショップに授業の一環として参加し，他大学の学生たちと駅前の活性化についてディスカッションをして刺激を受けた．もともと人見知りな方だったが，EMP2 期のメンバーとしてフリーペーパー作りのため駅前の店を取材したり仲間と会議を重ねたりしたことで，積極性がつき，好奇心旺盛になった．そのことが現在の営業の仕事に役立っている．打ち合わせの合間の雑談で地域のことを話題にしたり，何でも興味を持ってわからないことを質問することで顧客や上司とコミュニケーションがとれる．今後，地域活動の予定はとくにないが，EMP の活動は自分の視野を広げてくれた．そのことが職業選択にも影響し，今の自分に繋がっている．

事例⑨　（2 期生，福井市出身，県内出版業に就職）

中学生の頃，地元の公民館のジュニアリーダーをしており，キャンプや祭りなどで小学生の子どもたちのリーダーとして様々な企画を運営していた．しかし地域活動やまちづくりへの関心はそれほどあったわけではなかった．EMP で学生が主体となってまちあるき

ツアーなどを企画立案し，実際に運営させてもらえたことで，仲間と協力して物事をやり遂げる力が身についた．現在，雑誌の編集の仕事をしているが，EMP でフリーペーパーを作ったことがこの業界に興味を持つ大きなきっかけだったし，アポ取りをして取材に行くという経験がそのまま役に立っている．今後具体的な地域活動の予定はないが，記事を作るにあたって地域の情報収集は常に行っている．

4．若者の地域活動参加がもたらす効果　―結びに代えて

福井県の 20 代の若者にとって，地域活動や社会貢献活動が占める比重は生活する上で決して大きくはない．彼らの抱く「希望」の中身は仕事や結婚，家族に関することであり，半数以上の若者がそれらの実現に向けて行動しているが，地域活動もしくはボランティア活動に参加する者の割合は 3 割弱に留まる．しかし，彼らが地域活動やボランティア活動に参加しない理由は，それらの活動に関心がないというよりも，参加の仕方がわからないからであり，男性の約 3 割，女性の約 4 割がこれに該当する．つまり，地域活動に参加する何らかのきっかけがあれば，彼らは地域活動に力を発揮する可能性を有している．

実際に，大学の授業をきっかけに地域活動に参加した「福井大学 EMP 実行委員会」のメンバーへのアンケート調査を実施したところ，若者に地域活動参加の機会を提供することがもたらす効果はさしあたり三つに類型化することができた．もともと地域活動に熱心で機会提供の有無に関わらず継続的にさまざまな地域活動を行う「地域活動アクティブ群」，地域活動の機会提供によって地域活動への意欲を高め行動に移し始める「地域活動ウォームアップ群」，地域活動の機会提供を職業キャリアの展開に活用する「地域活動ポテンシャル群」の三つである．それぞれの類型の事例を検討すると，地域活動の機会提供は彼らの将来展望とそれへ向けた行動に概ねポジティブな変化をもたらしており，地域活動の参加経験がない若者に，何らかの形で地域活動参加の機会を提供することが，若者の地域活動参加および地域への関心を高める上で確実に効果をもたらすことが示された．

これらの結果からさらに指摘できることは，以下の三点である．第一に，「地域活動ポテンシャル群」の事例に典型的に示されているように，地域活動への参加は，20 代の若者にとって最も重要な希望である「仕事」に対する展望を広げる効果があるということだ．このことは「地域活動アクティブ群」および「地域活動ウォームアップ群」の事例からも見出すことができる．つまり，キャリア教育としての地域活動効果が確認できたといえる．

第二に，地域活動の参加がもたらすポジティブな効果は，女性にとってより重要ではないかということである．20 代の若者の地域活動参加割合は女性の方が低く，男性 2 割に

対し女性は1割に満たない．前節で検討した福井大学EMP実行委員会の事例は，メンバーの9割以上が女性であり，彼女たちは地域活動に参加する機会を得たことで，自らの地域への関心を高め行動に移したり，職業キャリアに結び付けたりすることができている．とりわけEMPのように女子学生が主体となって活動する団体の活動は，女性のリーダーシップを養う場としても意味を持っている．男性よりも地域活動への参加率が低い女性に対し，とくに気軽に参加できるような機会を提供していくことが必要である．

第三に，若者が地域活動に参加することは，地域社会のあり方そのものを変えることにつながる．「地域における若者の不在」を嘆く地域社会は，いわば若者の地域参加を排除した形で成立してしまっているとも言える．若者が新たな地域活動の担い手として参入することは，若者を排除しない地域社会を作ることにつながるはずである．また，地域活動への参加が少ない女性が多く参入し，地域づくりに参画することは，地域の男女共同参画を進めるだけでなく，地域活動に新鮮な視点が加わることにもつながる．

地域の側が若者に対して「希望」を持ち，地域社会全体で若者を地域の担い手として育てるために，若者が地域活動に参加しやすくなるような「きっかけ」を意識的に作ることができれば，地域社会に若者を包摂することはそれほど困難ではないはずだ．そのためには地域社会の側に変化を積極的に受け容れる覚悟が必要である．

参考文献

阿部真大『地方にこもる若者たち』朝日新書，2013年．

子どもの参画情報センター編『子ども・若者の参画』萌文社，2002年．

中央教育審議会「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）（中教審第160号）」2013年1月21日．

玄田有史（編著）『希望学』中公新書ラクレ，2006年．

玄田有史「福井調査2011年11月11日打合せ資料」（未刊行）2011年．

玄田有史「福井の希望を考える」東大社研・玄田有史編『希望学　あしたの向こうに　―希望の福井，福井の希望』東京大学出版会，2013年，47-62頁．

東京大学社会科学研究所ほか「『福井の希望と社会生活調査』結果の概要」2011年．

福井県福井市「福井市中心市街地活性化基本計画（平成19年11月）」，2007年．

――「第2期福井市中心市街地活性化基本計画（平成25年4月）」，2013年．

福井市役所都市戦略部都市整備室「ツナガルマチナカライフ（第2期福井市中心市街地活性化基本計画）」2013年．

福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」実行委員会『学び合うコミュニティを培う　第2年次報告書　―公民館の意味・職員の役割・実践の展開を問い直す』，2013年．

福井大学EMP実行委員会『学生発信！駅前プロデュースin FUKUI提言書』2011年．

同　『2011年度Enjoy My town Project報告書』2012年．

同　『2012年度Enjoy My town Project報告書』2013年．

古市憲寿『希望難民ご一行様』光文社新書，2010年．

宮本みち子『若者が無縁化する』ちくま新書，2012年．

山崎亮『コミュニティ・デザインの時代』2012年，中公新書．